

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. 4



令和 7 年 4 月 1 日 発行 (毎月 1 回 1 日 発行) 第 73 卷 第 4 号

No.803

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 四月号 (通巻八〇三号)

◇今月の二十首詠……第二の人生 中山真弓 2

■作品A 浜谷久子・本元由美子他 4

A 白子友侑子他 18

B 浜名結衣他 44

C 春潮洋平他 56

A 大寺智子他 68

■オリーブ集 杉浦詩子・鈴木文子他 36

◇今月の二人 栄藤公子・岡田博子 14

私と短歌との出会い (272) 金尾秀実 17

■泉 嘉穂子歌集『石見神楽』批評 三井修 28

二つの故郷 森みずえ

■〈第一歌集を読む〉25 32

坂出裕子歌集『日高川水游』

—裕子変幻—

坂上直美

■遊覧寄港〈無花果農家の歩み〉 藤井君康 42

■歌壇月旦 西堤啓子 43

文芸誌「GOAT」より

■二月号作品批評 60

A……………檜垣美保子・色井静代

箕浦 勤・玉井綾子

B……………設楽まゆみ・菊地栄子

C……………三浦好博

オリーブ集……………市原やよひ

十首選 酒井治子・佐藤光正 55

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より [編集部] 80

第71回地中海全国大会(大津大会)ご案内 81

クリップ……………表3 82

神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

第二の人生

中山 真弓

新品のパジャマも服もSサイズ小さき母も昔はLL

干し柿の出来栄えほめることもせぬ食べ方の雑も母の老いなり

小指ほどの薬一錠に救われる　せん妄とう介護の波知る

手詰まりに夫マッサージの機転利く顔のやわらぐ母みてなごむ

聴覚や嗅覚弱まる母のため私のいやしにもアロマキャンドル

手出しひかえ出来るをほめる介護やめ手取り足取り母は無垢なり

母なのに他人の顔されありがとう　どういたしまして私は娘よ

気分よくお酒飲めるは長所かな純米酒好み家飲みささやか

昭和三十八年生まれ
平成十五年地中海入社
信濃支社所属
歌集に『空色のママチャリ』がある

父母よりの健康な体に感謝して体組成計にて課す記録

すがすがしく「仕事納めをしました」は 無職介護の我をもやもや

夫ぼつり老後は猫を飼いたいと反対の我は理由を並べる

母をほめ私の歌集もほめくるる夫はこのごろ褒める努力す

趣味あまた歌集を彩る頁割り 友と楽しみ深めてゆこう

ありがたし温かき書簡のひとつひとつ歌集とともに宝となりたり

我が人生節目の大切「富士登山」「ホノルルマラソン」「歌集出版」

色違いの矢絣着物は母と私の和ダンス上段に重ね仕舞い置く

年季入るたとう紙のまもる着物・帯 虫干しの後たとう紙あらため

六十代飾り巻きずしを特技としドラえもんを私のおはこに

一冊の本『飾り巻きずし』を極めれば嫁にも孫にも自慢の夕餉

中山家の智裕・貴裕息子の名 夫は嫁に由来を語る

作品 A

浜谷 久子

はらから

・地

はらからの心集めていたと知る母の手料理子ら巢立つのち
雨の日を畑に出てみる固い芽を赤く突き出す枯れ色紫陽花
こぼれ種のいつか芽を出す紫蘇苦瓜体内時計の悠然正確
一年分種の満杯段ボール粒選り胡瓜苦瓜落花生
ミント萑野生となつて生きる畑根っこ絶やさぬ蓬とともに
見ることのない故郷を思わぬか二十五歳の白くまピース
引き返すことなく来た道ようやくを佇んで見るめぐりの風景

本元 由美子

何色の鬼

・岡

風の舞ふ荒庭に出て枯れ葉掃く夫の背中に五十年のめぐる
柔らかき乳の匂ひを纏ふ姑ふたびの童を生きて吾を満たす
再びの童を生くる母のゐる乳の匂ひにわれはみたさる
節分の大社の宮に詣れば各々の鬼をはらひつるかな
わがぬちに何色の鬼を住まはすか八十歳の今六根清浄
墓山の谷間を抜ける風の声死者の騒ぎの轟轟と鳴る
遠き日に熱く語りたる生徒指導 見上げし空に冬銀河牙ゆ

檜垣 美保子

手

・昂

傾眠のじかんの長きははとなりまもなく光の春のきさらぎ
ふつくりとふくれて白きははの手をにぎればにぎりかえすは言葉
ははの手は胸元にかかるくにぎられて午前十時の寝息とこのう
一月の床の間に細き一幅 僧空外の「夢」の一文
ひとしきり椿の枝のゆれておりメジロつぎつぎ花を訪いゆく
冬ざれの吹きさらしの裸木のてっぺんにカラス睥睨しおり
街路樹の根方に置かれ乾きたる花束のセロファン風にふるえて

福田 庸子

冬の光

・今

滝壺に届きある光やはらかし冬の木の間を布引の滝
明治期に成せる貯水池おほらかに水はいくつもの滝を生みつつ
整へる行政の技に伸ばす歩よ新神戸駅より滝は間近し
吠えられし記憶残れる森の家しづもるままに朽ちしその身よ
筑波嶺を見放くる丘に並む列の葱の青さよ快晴のもと
荷の隅に詰められてゐるし福井新聞日本海の記事細やかに読む
ゆらめける御幣新たし田の上に今年の祈り村の社は

藤田美智子

春へ

・新

運ばれ来しひと皿をまづは撮る人を待たずにわれは食べ始めたり
犬も猫も飼ひてはをらず三人の人間がそれぞれ家を散らかす
亡き人と生きゐるわれと夢のなか共に見知らぬ街を旅する
教へ子の父らしき人夢に来て息子の消息を語りくれたり
泣くことの少なき日々と気づきたり注したる目薬頬を伝ひて
日の入りの時刻を日ごとわれに告ぐ君もひそかに春を待ちゐる
木木の間に空気がふくら溜めながら山は春へと近づきてゆく

藤森 巳行

新年の歌

・銀

傘寿越え米寿をめざし人生の勝利の劇を演じてゆかむ
我が妻は樂觀主義で生きてゐる行き詰まらない何とかなるさ
創大で学び鍛へし青春の誉れを胸に社会へ飛翔
良き友と良き先生に恵まれて学園生活楽しく過ぐせ
語学力磨いて世界に雄飛せよ眞珠^{パール}咲の活躍ジイジは祈る
サッカーで心と体を練磨して希望に向かひ勇氣のキック
この一年幸福家族の実証と孫の成長祈るジジババ

牧 雄彦

よいしよ

・大

残るわがいのち燃やさむかへで葉の真つ赤な色に華やぐを見つ
時移る速さに惑ふゆふぐれを銀杏樹は早や葉を落としたり
はらはらと槓^{かた}もみちが風に乗りわが行く方に流れゆくなり
川ひとつ越ゆれば隣の県に入る少し寒さの暮る思ひす
入りつ日に紅く染まれる浮雲が師走の町を華やかにせり
淡雪の舞ふ駅前マルシェとふ屋台に孫と鯛焼を食ふ
「よいしよ」とふ言葉とため息増す日々よ八十七歳は老人といふ

松浦 禎子

七十年

・羊

中学の同級時より七十年いさかいてもなく流れし月日
身めぐりの人々消えゆくことわりもみな引き入れて年は明けたり
わたくしの老後の散歩こともなく未だ続きぬ葉師の公園
齒の抜けし齒茎そのまますぎてわが存命をあたためるか
公園で今日も会いたる芝犬がしばらくわれの顔を見上ぐる
汝があるじとわれの顔とを見くらべて愚犬はいそがたわらを過ぐ
山の端にピンクの綿雲ただよいてひとりなれどもわたしの家路

松永 智子

影

・嵐

人を呼ぶ声とほりくる夜半目覚めきくとなく聞く犬の遠吠え
人の声車の音の絶えし夜半遠くに犬の声ききねむる
何を呼ぶ声にてあらむ闇にきく犬の遠吠え故なく寂し
音のなく明ける東天ことばなく待つわれの影ふむことのなく
十字路にさやうならのこゑのこし人遠ざかるを立ちて見送る
人の影消えゆきし闇しばしみてさやうならをつぶやき立ち去る
さやうならさやうならをくり返し遠くなりゆく人の影追ふ

松本多摩子

覚悟

・桜

傘寿すぎ母に似てると言う声の届く日常うれしはずかし
ゆっくりと元に戻して気持ちまで一人ぐらしの覚悟の数日
倒れこみ死力を尽くすランナーに二日の朝はむかしも今も
久し振りももちろんとおしやべりはデイに通うも高校生に
小柄ゆえ背すじ伸ばして生きてきた八十の今も曲がることなく
娘がくれる微かな楽しみチケットの当選を待つ今日は大寒
定刻に帰るからこそ日脚伸ぶ変化感じて一月終わる

三浦好博

そしてこの国

・鮎

同僚の二人が命終はりたり我が終はりハテ知らぬのどかさ
子供とは「未来と希望」ウクライナ・ガザの惨劇そしてこの国
弧を描く水平線を眺めつつ子の街の施設に行くを決めかね
健康に良き故笑へとああ無理に気持ちに反するブルーな笑顔
吟詠の我が声空に吸はれつつ丘より今朝は富士山が見ゆ
茶花咲く角を曲がりて蠟梅の咲く庭眺め表札を見て
高齢化の人数に吾も加はりて罪のごとくに生きてをるなり

三木まり

儂

・昂

滅びゆく種を守るひと北の地にトキはタァタァ鳴きつつ舞い飛ぶ
蒼蒼と輪郭あざやか寒の月北の空にトキは滅びる
枯れ井戸の底から見上げる空の星 白く蒼くその光儂く
見上げればきらきらと星光り地上の芥を浄化している
塵芥ひとの営み儂くて新雪ふかく覆い隠す
丈高く茎を伸ばすツワの実はやがて綿毛を纏って飛び立つ
オルゴールの旋律が母に降りかかる寝たきりの朝の目覚し時計

宮本靖彦

正月

・凌

正月空青きに黒雲段に染むトランプ乱なき平和を望む
老椿巳年の庭に蕾見せ今年も活き活き分を尽くせと
二つの病二軒の医院で全快と告げられ嬉し節分間近
年一度山茶花の紅に囲まるる古家明るく老夫婦笑む
暖房の音立つ地下に脳検査待つ吾の心冷やしつづける
節分を旬日に控へ大寒の意地を見せむと寒風の吹く
立春の雲ひとつなき寒き日に焼肉を餌に孫来るを待つ

三好聖三

広島

・伊

猫たちがキーボードを踏んでゆくやれやれ文が壊されてゆく
流れ星 猫が落として食べている剃刀山のふもとの村に
梅の花匂えるところ白菜の外葉を筆り根元を削る
あなたなの 奥さんが来ると思ったと松永智子が放つ駅頭
三好さんは宇品港から征ったのよ松永智子がほつりと言えり
鴉らの手すりの上の横歩き餌喰うまでのふるまいおかし
たくさんの蜷がいるとの伝聞に遠く見るのみげんこつ山は

御代田澄江

冬の星座

・茨

久々に買ふ二十四節気載る家庭暦まつ小寒の来て大寒の来る
NHK人気番組ブラタモリ正月朝の検温なしつつ
タモリ一行夏服のままも許さるる巡る京大阪滋賀淀城あたり
畏き辺り一般参賀にお出ましあり次期天皇は長子^{ひこ}はた男子
澄み渡る空にきらめく冬の星座草子も語るスバル^{ひこ}牽牛星
箱根駅伝往路復路と纏^{まと}継ぎ若者走る走れ走れ
五日小寒寒に入りたり足許のそぞろに寒し衣^{きぬ}を重ねぬ

もとむらしげと

ガザ

・そ

ガザの死を報ずる新聞畳みたる手に柔らかし冬の陽ざしは
五万人死にしと報ずガザの死のどの一つをも我に関わらぬ
裏金も炉の再稼動もガザの死も紐にくくられ運ばれてゆく
停戦がきょう始まりて髭づらのガザの男がよろこび歌う
露西亜軍の前線に立ち捕虜となりし北朝鮮兵の本音が漏れる
破壊まで民をあざむきつづけるか血色よろしき金氏一族
「トランプ再始動」の大見出しいつまで青いかアメリカの空

桃原佳子

初詣

・沖

約束は明日の十三時路線図を出して行き方確かめている
人心の荒さむ世なれど元旦に初詣終えこの冬生きゆく
短歌という縁にて出会ひ別れたるあの人この人思う今日なり
朝々に牡丹の新芽覗き見る葉芽か花芽か楽しみている
掃り粉木で包丁叩き南瓜切る煮ればほくほくなんと甘きよ
籠もり居し家を抜け出し行き着きし川の流れに心を放つ
麦畑に雲雀一羽があゆみたりこの寒空に何を求むる

山下雅子

令和七年元旦

・習

新年は大気汚染も休みらし静かな令和七年元旦
恒例の新年会は二日なり二十三名うから集いぬ
十四人のマスク姿に見下ろさる夫の知らざるひまご達なり
高校の入試がなばる通人君体調第一婆のねがい
元日の当番医ははじめてと娘夫婦は夜かけつけぬ
久しぶりの幼稚園児史君よまだまだ欲しいママの通訳
敗戦より続く平和の八十年このありがたき尊き正月

山野幸司

薫

・沖

原発村果てなき夢に金流す税金なれば民の血と汗
われが田を見下ろし犬は遠吠えの夕暮れはやし何をかなしむ
藪続く桜の下の鳶払うからまりながらよたよた歩む
冬の空見上げる先にオリオンの三つの星に心が緊まる
庭の道歩む頭上の星の数折れど止まぬ地上の戦
ヤブツバキ君に捧げん腕伸ばす一輪の花そのまま落ちぬ
行くあてのなき心揺れたりシケシのガンガの畔けものら走る

山本 孟

私の昭和1

・大

満席の歌声喫茶声上げてロシア民謡また山男の歌
音楽の教科書になきシンコペーション歌声喫茶のリーダーリードす
ダンスにも盆踊りにもだめなわれ青春の日を歌声喫茶
ジャズ喫茶名曲喫茶どの席も男女静かにジュースを吸ひをり
ラジオよりダークダックスのハーモニーリズムに揺れる黒人霊歌
蔵のある家より洩るる「エリーゼの——」ピアノが止みて母呼ぶ幼な
ルールルル一夜明けのスキヤット由紀さおり晴れのみ空は鸞覗色

養学登志子

馳走

・凌

久しき日句の馳走をたのしまむと話のあいし友と連れ立ち
ほっこりと京の野菜の色取りに松葉に通すなごりの黒豆
あつあつの白味噌仕立の椀の物蓋とるときのわくわくごころ
寒鰯の季の魁浅みどりの反身の菜の芽をいたるをめず
ひとはだの京の美酒そそがる杯の厚みの唇にやさしき
膳のかたえ小さき筥に盛る誕生日の赤飯というこころうれしも
来月は新筍がのぞくかもほの約束のよき日いつの日

横田敏子

目標

・福

筆を執り歌を認め酒を酌む結志翁の優雅な白寿
移り来て五ヶ月となる娘の家に予想だにせぬ新年迎う
転送をされし賀状の届きたり お一人お一人お礼を言いぬ
十二月末となりたる退院に今年の賀状は欠礼しました
帰りたいき思い暮れど未だ不安 気力、体力そして寒さも
裸木はまだ醒めやらず立春といえども寒く冬眠半ば
「地中海全国大会のご案内」目標にして励みて行かん

磯田ひさ子

チヨコレート

・森

何鳥か落としゆきたるつはぶきの花が沈みてふたたび浮きぬ池の面につはぶきの花浮かびたりわれに誰ぞの便りなるらむさざ波の光にもまれ黄の花浮きつつひとつ所にもやふいづくにか湧く水あらむ池の面に水盛りあがり水を広げるひと冬を咲きつつ淡き西王母いぶせき日にも晴れやかな日もチヨコレート 金柑 わらび 時に買ふ逝きし家族の好物なりしことごとく家にもわれにも棲みつきぬ共に暮らしし家族にあれば

市原やよひ

雲

・萬

返事なき夫の写真におやすみを言つて今年の最後となる日なじみなき鳥の姿に急ぎ取る夫の愛したポケット図鑑今年また紋付姿で来たのだなようこそようこそジョービタキ殿おすおすと尻ごみする如消え行きし雲は何処へ冬空は青雲という不思議物体今日も又自在に空を遊びていたりあの雲は蛇の姿くねくねと渡って行った巳年の空を大雪のニュースを見つつ大罪を犯した如くに仰ぐ青空

梅本武義

啄木の思い

・羊

顧みる令和六年わが身にも見たる世間も良きこと少なし元日の朝の青空啄木の思いを感じ八十路越しても元日の夕暮れ隣家の老い同士健康歩きの出合いであいさつ久し振り氏神様へ初詣で遊びし石段竹杖突いて往路優勝に掛けし作戦見事なりわずか及ばずアンカーに同情なるようになるさであるがトランプの政治の臆測論議に見入るパリ協定離脱を急ぐトランプは山火事起こす異常気象無視

大浪美雪

冬の陽

・森

翡翠^{かはせみ}と気付くも遅し溝川のいつくかに消ゆ瑠璃色のこし年の瀬のつめたき風もものとせず枇杷の花開きぬ白きそのはな貼り替へし障子を通す冬の陽のほのぼの白しほのかに温し待ち待ちし今日といふ日に熱あると子よりのメール ああ息子よ熱さまし兵糧はと問ふばかり正月さなかどこも休みぞ五日後の医師の見立てはインフルエンザ熱は下がれど頭痛つづくとをちかへる命なりけり朔の月かきろひの中白く昇りぬ

奥田陽子

三十年

・羊

三十年はやも三十年信じがたく大震災の日ば巡り来て〈無事だよ〉の一言ありてそれよりは切れにし電話待ち続けいき子らの無事たしかめたりと報せありき山陰線に行きし夫の声ふかき祈り捧ぐる人ら映りいて重ねし長き時をおもうもそれぞれに子を得たる娘ら灯籠を流す画面の痛く迫り来震災を経てよりのちの雨の音春なお冷たき音と聞きいしかさね来し時の重きを思うにも心つつしむ陸月到期ぬ

小野雅子

枯葉

・羊

何の音といふのではない音のして遠く一日が始まつてゐる舞ひ込みし一枚の葉の形よき触れれば崩るもろさを持ちて褐色に乾ききりたる落葉にて掃けばたちまち形くづるる木はすでに葉を落ちつくしいづこより舞ひ降りし葉が形うつくし集めればゴミとなりゆくこの落葉、一枚のもつ美しさあり何の木の枯葉か知らず一枚の褐色の葉をうつくしと見るシャンソンも枯葉をうたふ舞ひ降りて土にとどけるまでの美

神田 鈴子

冬

・大

久々に会ふ友と揺らるるパスは今九つのトンネル通り抜けたたり
みどり褪せ錆色となる山深き能勢温泉にひと日癒さる

北国の大雪による計を聞く日 十日戎に街は賑はふ

粉雪はみぞれとなりて傘持たず帰路ゆくわれの濡れそぼちたり

雲間より光射し来て婚近き孫の面輪を明るく包む

突然の山火事に燃えさかる火はロサンゼルス^{ロサンゼルス}の街に近づく

あかあかと炎ひろがる映像を声もなくただ見つむるばかり

上 林 節 江

花さくように

・湾

蔵王嶺より雪のおとずれそのことも愉しさとなる白の天体

テラテラとスケートリンクの舗道なり四日目に解けかなう五千歩

枯れ小田に花さくように群鳥の白のさやけさ 護らせ給え

スーパ―に「今日のいちおし」もやしとよキムチ鍋にて大寒を越す

ひとり住む底なし沼の寂しさに呑みこまれまいぞばたばた暮らす

土曜日の宅配業務やめるとは十キロの米背おいて帰る

それぞれに痛みは言わず新年をまずは慶ぶ令和七年

菊 地 栄 子

ななかまど

・海

タクシードライバーの歌集に触れしに知己のご会話弾まず弘前に来て

境内のわが前にゆるり寝転がる黄粉と呼びたき毛色の子猫

「包みましようか」「いいえ私のマフラーなの」藍の薄もの手触りやさし

屋根瓦見当たらずおおかたトタン葺き東北北部積雪地帯

生命の洗濯などと唱えゆく東北道に尾花がなびく

葉を落とすルビー色冴えるななかまど明日は祝日物思いなし

たちまちに夕陽に棚引く黒き雲雲のショートタイム始まる気配

草刈 十 郎

動 画

・世

われはまだ明日といふ日の来ることを信じて明日の予定を描く
百歳の翁三味線小唄にと励む動画に気力いただく

われ老いて時の流れのいと早く明日が昨日となるがごとくに

霜の朝体まるめていつまでもベッドの中はまさに天国

スマホにてさまざま動画見せられて機能の進歩に追いつけぬわれ

甘えん坊でありし男孫もマフラーの似合ふ背丈となりてたくまし

花瓶にて黄菊白菊よりそひて秋の色どりデイクアの卓

河 野 繁 子

一筋縄

・雁

冬至すぎ朝日の位置は折り返す地球はまとも 戦争やまず

うす紫の光を放ち顔をだす朝日にときめく幸せ包む

吹く風に流され雲は進みゆく一筋縄では追えぬが自分

大人とは対話の出来ぬ子でありしムラサキカタバミ咲く辺の居場所

みじかき陽西に傾き槽山にグリーンフラッシュ芽吹き^{ミドリハナ}の如く

小三で漢検五級は我よりも漢字の多き手紙を届く

いつまでもラインを開けぬ友に打つ 「ひらけゴマ」

小 林 能 子

地球家族^{ちきゅうかぞ}寿ぐ

・羊

孫娘の日本語レッスン続かぬとスマホの便りバンコクより

バンコクで二人目も生みインドへと帰りゆく地球家族寿ぐ

チェンナイに赴く人あれば乗り継ぎのバンコクに花暦と絵本託しぬ

清澄池で滑りすつてんのらくろの絵葉書にひと言「転ぶなかれ」と

ひとり遊びの早口ことは「赤巻紙青巻紙」おつと「黄巻紙」囁む

吊り千せる萩の風情の懐かしくさびしき昼の線香を薫く

ポストンに香を弘める人の無事祈りて年の初め空薫

近藤 栄 昭

中 層

・虹

WWと果ての家並みが笑っている彼家も見んテレビのお笑いアンテナがWと立ちいる果ての屋マンションの中層景色がダルい二段降り一段残り前のめり身体の反射三段成功

ハンギングバスケットの花萎えてきた春まで保つか節分待ちいる男子とは同じと思う女子競技迫る気迫を柔らかにく見る冷えた掌に息吹きかける窓口に業務の声は当たりますようよぎる人過ぎゆく人は知らぬ人無人の散歩一人の軽さ

近 藤 芳 仙

檜の木

・信

実生の檜移し植ゑしは二十年前 猛暑の畑に日蔭をつくる繁りたる檜の枝葉に守られて鳥の巢はあり大きく確と今は早高く伸びたる檜の木の年年のばす枝剪り難し樹の落とす堅く小さき団栗の芽生えて数多 陽の下にありいつの日か畑に通へぬ日の来るを言ひ聞かせつつ齡重ねる切り倒す檜の根方が抱く石 石ありて根は強く伸びしか年月が枝葉と共にのばす根の石をからめて地中に長し

坂 上 直 美

年末年始

・天

正月の松を抱きて帰りゆく老いたる人よ弘法市の日雨もよい雪もよいなる今日の空亡亡くなりて独りのイヴよ君あらばホールケーキを二人して平らげたるをひとりの聖夜市田柿君が遺影に供えたり甘党なりき妻にも甘く

今年また賀状仕舞の知らせあり吾はしばらく書き続けなん才豊かならざる我のたどたとお歌作るたぶん死ぬまで青空に旗のごとくに見ゆる雲ああ我が心靡かせて行け

坂 出 裕 子

花水木

・洛

窓辺からいつも見てゐる花水木 日毎つぼみのふくらむやうな空に向き蕾かかけて花水木もうすぐ春と告げてくれをはりたがふなく春は来るらし花水木 日毎つぼみのふくらむ見れば寒いねと声をかければ寒いねと答へてくれるやうな気がして「あたたかくなるよもうすぐ」ふつくと蕾かかけて花の水木が窓の辺に立ちて日毎に眺めるる花の水木は家族のやうでもうすぐに春が来るよとはげましてくれてるやうな気がする木々が

篠 原 ま り 子

去年今年

・羊

つぶらなる瞳もちたる己を据えてよわい九十願うは何ぞ窓に見る入り陽は瞬時沈みゆくやさしき便りに生かされて今日本棚に並ぶ「地中海」糧として言葉に会える歳月惜しむ体調を氣遣う電話友の声二日のうちに亡き人となり急逝の友のファンは「スノーマン」見る間もなく涙で寝入る冬咲きのエリカの花に雪が舞う部屋に取り込む老婆のころ去年今年未だに赤きポインセチアせてものとも液肥を注ぐ

柴 田 登 志 恵

素 数

・天

冬空の蒼をゆく鳥まはり初め楔形文字は読み解けぬまま脳内に素数つらなり冬晴れの空を列なし鳥飛ぶ白しSolitudeは独りつてこと 棧橋のダウンジャケットの少年の言ふ蒼深き海峡の面に点ひとつたつたふ鳥の白銀かがやくわたくしの物語など聞くものはだあれもない 銀杏裸木群れはなれ冬空高くゆく鳥のちひさき白が見えなくなりぬうすら雪積む六甲の山並みをのぼる日はつか力増しをり

鈴木結志

醍醐味

・福

「欠点は常に裏から見た長所」徳富蘆花の言葉尊ぶ
未来への挑戦創造相入れる力と癒合信じるものを
行動は自力の中の教えなりすこやかにして書の技を練る
朝日あび木草のみどりさわやかに知恵の活路のいのちひき出す
ダリアの花霧の乙女と友合わせ供花らんまん詩情に結ぶ
移りゆく季の流れに身をまかせうたの歳時記に眼をひらく
挑戦の意気込みいまだ残りいてうたに覚ゆる醍醐味のあり

関根榮子

シモバシラ

・埜

テレビには秩父の風景流れおり友人逝きて秩父も遠し
この年の希望のごとき一枝は蕾ふくらむ白玉椿

シモバシラまたの名前はユキヨセソウ水分不足か生気のあらず
冬の日の楽しみなるにこの朝も茎に美しき霜柱なし

久々にカフェにひとり夕近き窓にめぐる日足はのびて

誰も居ぬ社ははやも一月尽お焚上げの灰残りていたり

南極のやまと山脈で発見され火星の石はその名もやまと

関根和美

父と兄

・埜

日本語に問う幼児へ父として答える言葉のまじしさを言う
渡豪せし十歳にとどまる日本語とその拙さを今日も口にす
日英に広東語つかい父母友に祖父母に応うる四歳せつなし
やがて母語英語の占めん幼児とししばし楽しめ日本語ワールド
日本の節句行事を尊べる夫と兄見守る妻なりうれし

新しき家族加わりばあばあと繰り返す画像にじいあせりぬ
航空券とったよというはじめてのプリスペンの家訪わん水無月

高尾恭子

七草たたく

・大

厨刃にまどろむ母の目をさませ春の七草とんと叩く
嫁ぎ来て八十年の本能寺町を今日をかきりと母は発ちたり
出立の朝のなごりに乱れ散る山茶花あかく小庭を染める
ショートステイと言いつくろいて送り出す母の足もと小さくゆれる
ごめんねの声はとどかず積みあがる賀茂の河原のまあるい小石
脳トレをさくさく解いて相席の端にひねもす無聊の母は
三代の無名者ならん父母を囲む8ミリのデータは失せて

高津砂千子

啓翁桜

・雫

朝明けの車窓より見る瀬戸の海肌の色して風ぎわたりたり
雪の花舞いまう昼の庭に立ちぼうとしておりうす陽さすなか
久びさの息子夫婦の留守の間は心もとなし何とはなけれど
冷えしるき睦月半ばに求めたりつばみあまたの啓翁桜

孫のこと詠わぬわれをいぶかしむ人あり笑顔のみにて足りる
わがうたは歩けばこそものにして閉じこもっては何もできない
明日あさのみそ汁の実は何にしよう眠りに入る前のたのしみ

滝田靖子

どんど焼き

・新

どんど焼きの火の前に男らの立ちてプラと金属は外しませうと言ふ
御守りのビニール熊手の小さき鈴まづは分別の人だかりの中
金属とプラスチックの分別のすみてどんどに焼べる正月
振りかざす刃に誰を傷つける愚かな正義に振り回されて
振りかざす自分の正義は本当に正義なのかと疑ひもせず
神事さへ動物虐待言ひ出した者こそが正義さういふ時代
唯一の正義と信じてゐるうちに不実な未来に踏み込んでしまふ

田 土 成 彦

土 鍋

・宙

はたはたと時雨が窓をぬらしゆく涙のやうに音もたてずに
 他人事ならねば転ばぬやうに行く霜白く置く草紅葉道
 捨て猫の夜寒に鳴いてゐる声の途切れ途切れてやがて消えたり
 白居易の旧居から出し茶碗わが家の土鍋と同じ大きさ
 錦市場百メートルほど行き引き返す異邦人めくはわれらにあれば
 殻をむく弾みではぜたピーナツの方二メートル行方不明に
 サイボーグではないけれどチタン製大腿骨にて十有余年

田 土 才 恵

ひとこと

・宙

ひとことの美味しかったに吹き飛びし疲れの後に孫帰るゆく
 ひとつまた紅葉芽ばえてミニ盆栽彩り増す日を心待ちにす
 突発性難聴の名に引かかりし梅雨の季節はおに過ぎ来て
 おいおいに難聴薄れてゆける中『手話がある』とう歌集の届く
 ファックス来て電話で用を足さぬ事胸にずしんと受け止めている
 階段から落ちて怪我してと電話来ぬ昨日も今日も階段を行き
 エスカレーターを選ばず上がる習慣に緊張はあり一段毎に

玉 井 綾 子

化粧

・羊

元知事と大統領の復選の報道横目に化粧して出る
 プライムの上場企業の正社員 既得権益側に寝ている
 一番線二番線とも到着し発車メモデイがノイズとなりぬ
 ヒゲ剃らぬことは化粧しないことだろうと想像する Female
 雨予報なくともうちのアレクサが降ると言うから傘持ちて出る
 黄葉も落葉もせぬマテバシイ 友は非正規雇用を続く
 雨上がりドン・キホーテの駐車場から富士山のシルエット撮る

中 島 央 子

晩 秋

・森

晩秋の公孫樹並木に散る落葉路肩に吹き寄せ風吹きたる
 とどまらぬ時を追ひかけ歩く道真赤き山茶花われを励ます
 体力や気力知力の衰へて龍角散一つぶ空回りする
 純毛を着てゐるからと撫ぜられて日差しの縁にくぐまる小犬
 乾きたる洗濯物の畳み役いつとはなしに我が役目なり
 取り戻す術なき日々を思ひつつ師走尽日父の命日
 流感の猛る年の瀬娘の咳の引く気配なく年あらたまる

永 田 進 一

初風呂

・山

初風呂は有馬温泉太閤の湯孫と語りぬ宇宙の誕生
 夜の海満天の星煌めきぬ地球も小さき星に非ずや
 西宮神社の赤門潜り来て福授かるや巳年初詣
 帰り道芦有道路は有料道路快適なれどカーブの多し
 思い出の第二国道いつしかにフランク永井の名歌の一節
 駆け抜ける都大路の女子駅伝郷里の栄誉を^{たすき}襷に繋ぐ
 着飾りし成人式のショール見る白く柔らかき乙女の装い

永 塚 節 子

足 音

・銀

リハビリは明日にしよう強き風に怖れをなして踵を返す
 取り壊し終えたるビルの空間に雲ひとつなき冬の青空
 原産は地中海北部と聞きしかばコーラルラビとう食しみんな
 クリスマスに届けられたるシクラメン葉組みなしつつ二月に入りぬ
 次の冬まで咲かせ続けむシクラメン夏を越す術よみがえりくる
 店先の水栽培のクロッカス間近く聞こゆる春の足音
 七七忌過ぎたる友が遠去かるリメンバミーの声を残して

仲西正子

アトリエ翔子

・沖

久が原のライラック通り目当てる茶房訪うアトリエ翔子入口に「共に生きる」と墨太く掲げてありぬ横書き和む書家なれどまた生まれたてのウエイトレスお品書き出す金澤翔子氏いそいそと接客をする翔子さんしずかに目で追うその母のあり上京の楽しみひとつ見つけたアトリエ翔子の茶房に憩う母と娘の恩愛想う帰り路の何やら温し北風のなかその映画「幾春かけて老いゆかん」翔子の題字も新宿にて観き

中村博子

観音竹

・漣

亡き母の片目に絵筆もて描きしユーモラスなる「鍾馗」の眼力巨大なる獅子柚子というザボンの亜種 雛と並べて華やぐ歳末苗木より巨木となりし山桜毛虫多発しバツサリ切断シルバーの植木屋さんは憩いし観音竹を無断で切りし満点のベースでないと翔平君デコの始球式の緊張話すひと言に真直ぐな心出でて来る大谷翔平のかがやく人柄年の瀬も新たな年もあわあわと心はずまぬ八十まり五つ

西堤啓子

地上絵

・天

高層も町家もホテル東山から見る地上絵に初日影のぶ職場へと急いだ震災の朝は青空に電線波打っていた被災の友は二ヶ月身を寄せて家中磨き神戸に帰る顔寄せて威嚇するひとの目の奥に探したけれどもういない君朝から怒鳴りしものを執着の電話入ればおだやかな風機嫌よく買い物あればと言う 電話一本 スペードのエース風露草のネガティブ・ケイバビリティ やせ土に花を咲かせて種を飛ばせり

久我田鶴子

びはの花

・羊

枇杷の木の下にたたずむ人ありて視線のさきへとわれをみちびくともすれば粉つばき香のふりかかる枇杷の木の下あゆみゆくとさくちばしに顔まで花粉まみれなれメジロの夢中こゑにこぼれ来干駄木に古書店「ほうろう」いまはなく東大近くといふ移転先往来堂書店なほあるうれしさに歌集一冊もとめて帰るブックカバーにモグラあしらふ往来堂 掘りて進めば行き着くどこかしのぼすの池に憩へる鴨の群れキンクロハジロは旅を語らず

● 地中海叢書・新刊案内 ●

- ・藤井満江遺歌集『風の坂道』（第954篇） 九曜書林
- ・石田明彦歌集『ロードノイズ』（第955篇） 九曜書林
- ・泉嘉穂子歌集『石見神楽』（第956篇） ながらみ書房
- ・中山真弓歌集『空色のママチャリ』（第957篇） 九曜書林
- ・牧雄彦歌文集『メコン渺々』（第958篇） しょく出版

〈近刊〉

- ・御代田澄江歌集『花の小夜曲セレナーデ』（第959篇） ながらみ書房
- ・若松喜子歌集『文鎮』（仮題）（第960篇） ながらみ書房
- ・久我田鶴子著『海に金槌ーわが短歌小史』（第961篇） 砂子屋書房
- ・久我田鶴子著『冬潮を航くー三好直太の歌』（第962篇） 六花書林
- ・鈴木剛之歌集『安積春秋』（第963篇） 九曜書林

今月の二人

ふるさと

栄藤 公子

人丸山の桜花^{さくら}散り敷く坂道を新しき制服^{ふく}の娘^こが踏みてゆく
一の谷^{いぐさ}の戦^{いくさ}を逃げきし公達の血を洗いしか小さな水路

海峡の霧ふかからむ終日を校舎に響く漁船の霧笛

夏休みが終わりに近づく切なさを知るたび私は大人になった

合歓の花そよげば杳^{とほ}き波の音わが胸臍もふるえてやまず

帰るたび高層ビルの数増して明石の街の陰翳ふかし

マンションに海の景色が切りとられ城、科学館ひっそりと建つ

ふるさとの杜に散る桜^{はな}仰ぎみる千の言葉が降りくるようだ

再びは戻ることなき花びらが水の流れに逆らわずゆく

法要を終えしふるさと去りがたく姉と明石の海を見に行く

地震^{ない}に揺れ橋につながれ削^そがれつつ海にどっかと国生みの島

瀬戸内の早春の風つめたくて岸壁めざし波は寄りくる

ゆったりと人の心を染めながら海に大きな夕日が沈む

なぜ私が短歌に嵌ったか

勉強嫌いだっただ私が短歌をやっているという、首を傾げる人がいるかもしれない。私は古典の文法が苦手だったし。(当然短歌は現代かな遣いである)しかしそんな私にも、和歌の世界は意外に身近にあった。東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

高校の授業で学んだ菅原道真の歌であるが、通学路に碑があり、大宰府に流される時立ち寄った、明石の駅^{えき}家跡も近かった。

又、別の通学路には柿本人麻呂ゆかりの人丸神社があった。そこから明石海峡が一望でき、淡路島は目前にあったので、人麻呂の故事や、源兼昌の歌にも思いを馳せた。

淡路島通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守

父の死後、父のスケッチブックに短歌を数首見つけた。父は若い頃、短歌をやっていたと聞く。もし私が短歌をやれば、父は喜んでくれるのではないかとふと思った。それ以来三十五年、拙い短歌を細々と詠み続け、今は私の生きがいともなっている。

良き師と出会い、良き仲間がおり、私はなんて運が良いのだろう。勉強嫌いの私が短歌に嵌るとは思ってもいなかったが……。